いつかの箱のなかみ【twitter小説/短編集】

いとおき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつかの箱のなかみ【ｔｗｉｔｔｅｒ小説／短編集】

【Ｎコード】

Ｎ７６１２Ｚ

【作者名】

いとおき

【あらすじ】

１４０文字前後の話を中心に、掌編など１４０文字×数回分で完結しているものも混ざった短編集です。Ｔｗｉｔｔｅｒのログをまとめています。Ｔｗｉｔｔｅｒ投稿時より少し変わっているもの、文章が増量したものがあります。

『1、窓をへだてて　／2、靴と女の子　／3、小人のワルツ　／4、包みこむ

『1、窓をへだてて　――――』

庭の雪までとけそうなほど、暖炉が明々と燃える部屋の中。かけまわってこどもたちが遊んでいる。額に汗さえうかべる姿が彼には微笑ましくてしかたない。

中へおじゃましてこの体でぎゅっと抱きしめたらこどもたちは喜ばないかな、と想像して彼は笑った。

雪で作られた自分の体じゃ、見る間に床を水びたしにしてしまう。

『2、靴と女の子　――――』

あの女の子は赤い靴に住んでいる。おばあちゃんの代から、修繕され、履き継がれてきた赤い靴。今は私のお気に入り。

昼間は私の、夜はあの娘の。ふたりでひとつの赤い靴。思い出の詰まったその靴の、私の知らない思い出を、赤い靴に住むあの女の子はすべてその身で知っている。

『3、小人のワルツ　――――』

はちゃめちゃなメリーゴーラウンドを見ているみたいだ、と思って子供は笑った。

自分の目の前、円陣を組んでくるくる踊る小人たちが子供には見えた。
一人は跳ね馬のまね、別のがサーカス団員さながらその上にとびのる。
おどり、ラッパを吹く赤ら顔、うしろで鼻をしかめてめいっぱい距離をおく姫君風の娘は、みょうちきりんな生き物に腰かけている。
姫君風に下敷きにされたみょうちきりんのよろよろの足どりときたら。
「こら、叱られている時に笑うのをやめなさい」
眉をつりあげて怒る父の肩に跳ね馬小人がいきおいあまって落っこちた。
肩の上で慌てる小人に見むきもせずに怒り心頭の父がおかしくってたまらない。
自分の頭の上がばかみたいな騒ぎになっているとは知らずに説教しているのだ。

『4、包みこむひと　――――』

私はふとっちょさん。
「食いしん坊、きっと料理の得意な人」周りからはそう思われてる。
思われてるなら応えたい。パンをこね、焼き、料理を山もり器に盛りつける。そうして訪れた人をもてなす。
いつの頃か、玄関には客人の誰かがとりつけた看板が掲げられ、私はちいさな店のおおきな店主になったのだった。

『5、待つ木馬／6、ちいさいさん／7、雨に弱い家／8、人の心は絶えず動い

『5、待つ木馬　――――』

揺れる木馬が泣いている。

空っぽの部屋はカーテンが閉じられ、暗く沈む。あのお陽さまのような明るさはどこへいったのか。

「はやく帰っておいで」

閉じた口で木馬はいななく。あの子がいたなら木馬の声が聞こえたろうに。――

――どこにでも連れて行ってあげる。草原にも海原にも宇宙にだって。

あの子がいればどこにでも行ける。心ひとつで飛べる気になる。

あと幾日数えたらあの子は帰ってくるのだろう。蒸し暑い夏はまだ始まったばかりなのに、木馬の心は寒々している。あの幼い子がいないというだけで。

『6、ちいさいさん　――――』

ちいさいさんは、めいっぱい怒っていたんだよ。頭からぽっぽ湯気が出そうな勢いだった。

おおきいさんは、それを見ながらゆったり「うん、うん」とうなずくばかり。

ちいさいさん、よけい怒ってちいさい体でかげんなくあばれたものだから、つかれ果てて、最後はくたり眠っちゃったよ。

『7、雨に弱い家　――――』

「明日から頑張るぞ！」

青年は自分に気合をいれた。今夜のうちに支度も済ませ、すでに明日の準備も万端。

――　一夜明けた朝、窓の外はどうどう降りの豪雨だった。

眼前の道は大河もかくや。見る間に家は孤島に早変わりした。

青年は鞄とドアを見比べてうなずいた。

「明日以降、頑張るぞ！」

『8、人の心は絶えず動いている　――――』

宝島を探して彼は旅に出た。

夢は海原同様果てがない。舟は宝島はおろか島の影も掴めなかった。

陸を求め彷徨うこと二か月。

水滴ほどの水さえ費えた彼の目に飛び込んできたのは楽園のように豊かな孤島。

果物の香りが滴り満ちる島に足をおろした瞬間、彼は舟を振り返らず島に根をおろした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7612z/

いつかの箱のなかみ【twitter小説/短編集】

2011年12月29日00時45分発行